

いつまでも、この街は私の実家。
これからの住宅街での暮らししかた

河野美紀

私たちの暮らす街では日々変化がおこり、1日として同じ街であることはない。
自分の暮らしているこの街が、今後どのように変わってゆくのか。
また、変化の中で建築はどのように建つと良いのかということを考えたい。

敷地として選んだ瀬谷区阿久和の住宅街の中には、さまざまな時間が流れている。
ずっと古くから存在する地形や道、数十年で建て変わる住宅、夏に繁り冬には枯れる植物たち、
朝に干され夕方には取り込まれる洗濯物…

そのように、暮らしに関わるものそれぞれの時間のリズムがバランスよく異なり、ずれていることで、
この場所での暮らしが豊かに感じられる。



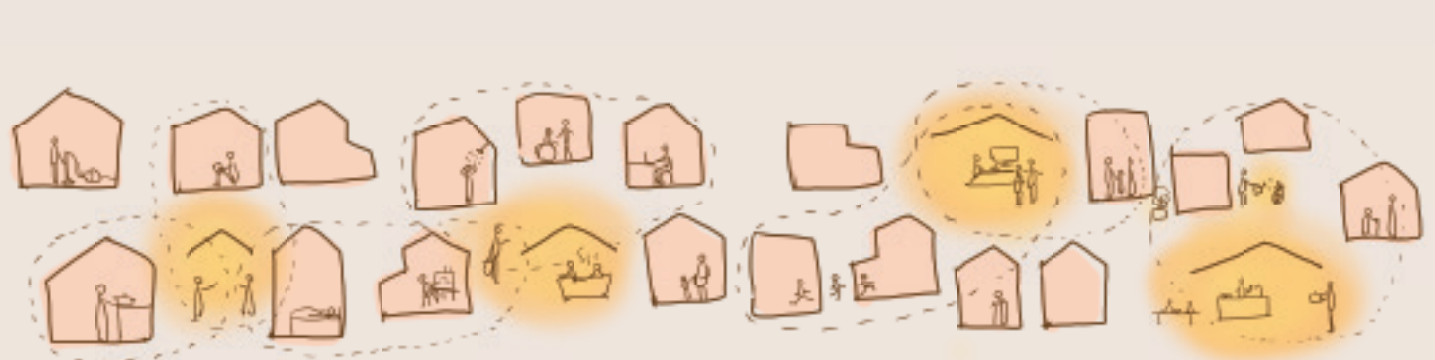
更新リズムを保った変化

街にはそれぞれ固有の更新リズムが存在すると考える。都心の駅前のようにいつも工事が行われている街では更新が早く、田舎町では更新は遅い。人は自分の生まれ育った街の移り変わりの速さを、知らず知らずのうちに原体験として持っている。自分の育った街よりも更新の早い街に来れば慌ただしく感じ、遅いところに来ればゆったりした街だと感じるだろう。実家や自分が育った街の今後を考えると、その街固有の更新のリズムを見直すことが大切になるのではないかと考えた。



街全体を実家のように使った暮らし

郊外にある私の実家がなくなってしまうことに寂しさを覚え、住み続けられる住宅街にするために、住宅とその場所の公共（個人所有じゃないもの）のかたちを考えたい。暮らしにとって大事な公共施設が家から離れていることで、街の中で自分の家しか自分のものでないと感じる。
住宅が集まったような場所にも、点々と細かく公共の場所が混ざっていて、自分の家の延長としてそのような場所を使った暮らしができないだろうか。そうなれば時が経ち家の寿命がきて物体として実家が失われようと、実家のように思い入れのある場所が街全体に広がっているという状況を作り出せる。



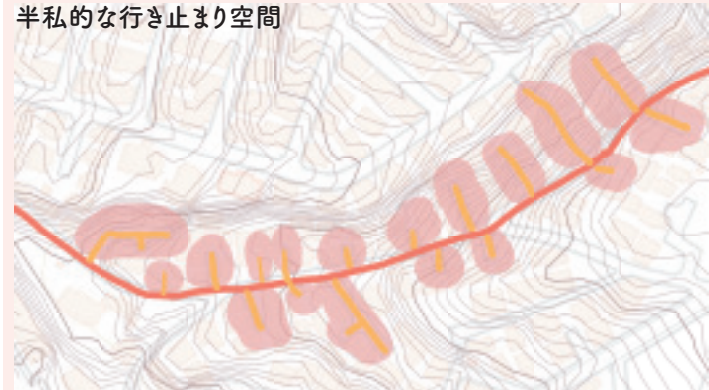
敷地 横浜市瀬谷区阿久和東



横浜市瀬谷区阿久和は、戦後徐々に山や畑がパッチワーク状に切り開かれてきた住宅街である。住宅の建設時期が街区や袋小路の道ごとの固まりごとで異なることで、まちの中には色々な時間のサイクルがあることがわかる。さらに、地形により高低差や曲がる道があることで、住宅が連続するにもかかわらず、均質でない暮らしの場所が作られている。



半私的な行き止まり空間



敷地には谷から尾根道へと緩やかに登る主動線となる道があり、そこからたくさんの袋小路が伸びている。袋小路にはおおよそ 4~10 軒程度の住宅が面しており、袋小路は手動線の道よりも私的なものとして子供たちが遊んだり植木鉢が並んだり暮らしが溢れる場所になっている。道を使う人が限定される袋小路は道でありながらも自分の庭の延長として扱われ、さらに袋小路に面する家の住民はその他の場所に住む近所の人よりも身内のように感じるようになる。



壁の形が道を決める



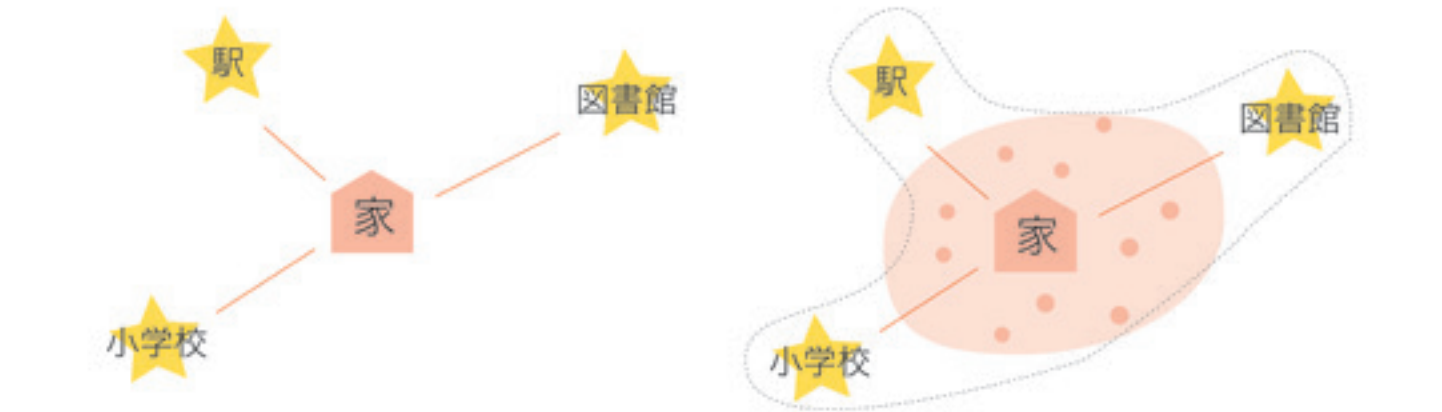
これは敷地である瀬谷区阿久和東の家々の敷地境界線に存在するブロック塀などのプロットである。このように表すと、塀で囲まれなかった場所が自然と道に見えてくる。塀を立てることは一見閉鎖的で歓迎されないことのように思われがちであるが、この住宅街では塀はそれぞれの家をまもるだけでなく、道をみんなのものとして保証しているようにも感じる。



街全体を実家のようにするために

敷地を選んだ横浜市瀬谷区阿久和の住宅街では、暮らしに必要な公共施設やスーパーマーケット、駅などが住宅から離れている。生活に必要な場所は徒歩でアクセスできるが遠い。このような住宅地に住む人の生活圏は下の左の図のように、目的地と家を結んだ星座のようになる。

住宅が集まったような場所にも、点々と細かく公共の場所が混ざっていて、自分の家の延長としてそのような場所を使った暮らしができないだろうか。そうすれば時間が経ち家の寿命がきて物体として実家が失われようと、実家のように思い入れのある場所が街全体に広がっているという状況を作り出せる。



構成要素の分析

壁・塀



建築未満のブロックや植物などさまざまな囲むことで、自分の場所であると示すことができる。さらに、外界との最初の接点となる場所であるため、活動が現れやすく綺麗に見せようと工夫をする。

床



床に一段上がるときに、靴を脱ぐという行為が現れる。これは自分の床に入るときには安心感を、知らない床に上がるときには緊張感を持たせる。地面の高さという視点で考えると、地面には必ず所有者がいることから、そこは他人の所有物であるという感覚を伴う。

屋根



住宅の屋根とは別に、車のための透明な軽い屋根があちこちで伸ばされている。このような屋根の下は暮らしの中の多くの場面で利用される。さらに屋根の形は、街を歩いているときに見える空の形を決めている。屋根の形が変わると、切り取られ方が変わり、風景の体験も変化する。

操作

袋小路の入り口に建てる

まちの成り立ちに深く関わる袋小路は、このまちの中で小さなコミュニティをすでに成り立たせている。それを手がかりとして、自分のものであるように感じられつつ、まちの一部でもあるような場所をつくる。



層をつくる

塀や柵、植物、庭、壁などの構成要素が多重に重なり、暮らしが見え隠れすることがこのまちの風景の作られ方であると考え、設計に取り入れた。袋小路にはみ出るように壁を伸ばし、既存の塀は残しつつ、より自分のものらしく感じられるような形を考えた。



配置

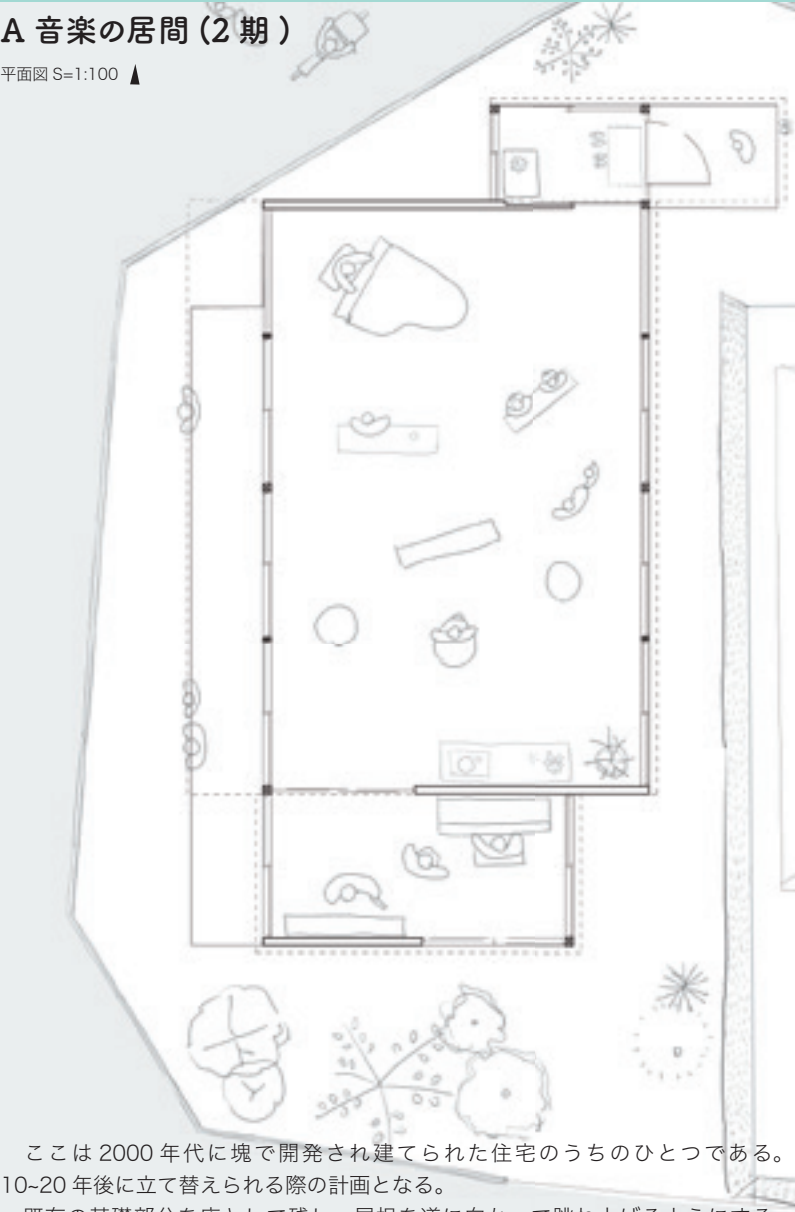


瀬谷区阿久和東での“ちらほら”という風景の変化がこの街らしさを保っており、新しく場所を計画するときにも大きく変えることなく“ちらほら”と街の風景を引き継ぎながら建てることが重要であると考えた。

1960年代に開発され、現在建て替え時期の住宅の敷地に、ここに住む人のための場所を設計する。(1期)約10年後にはとなりの街区の住宅群が建て替え時期になるので、同じように細かく建築を点在させる。(2期)このように住宅の建て替えやスポンジ化現象という街の移り変わりのなかで少しずつ細かな公共の場を住宅街に埋め込んでいく。均質な住宅街の中に点々と公共の場所が展開していくことで、少しずつ街全体が家のように使えるようになってゆく。

A 音楽の居間(2期)

平面図 S=1:100 ▲



ここは2000年代に塊で開発され建てられた住宅のうちのひとつである。10~20年後に立て替えられる際の計画となる。

既存の基礎部分を床として残し、屋根を道に向かって跳ね上げるようにする。坂に登ってくる人々からでも中の様子がわかるようになる。内部を広く取るために壁は主動線に対し平行にした。



B 子どもたちの集まる居間(2期)

平面図 S=1:100 ▼



Y字路に接する場所には、広場に対しての繋がり方を考えながら設計した。広場側に開きつつ、開けっ広げにしすぎないように互い違いに壁を配した。道を歩きながら見ると、内側での活動の様子が見え隠れする。床は既存の住宅の基礎の部分を残しながら、新しく屋根をかける。壁と屋根は袋小路側に飛び出し、袋小路側に勝手口のようなものができる。



C キッチンのある居間(1期)

平面図 S=1:100 ▼



広場と一体で使えるように広場側の塀を減築し、視界の広がったところに道から見えるように座敷を計画した。少し腰掛けてちょ世間話が始まったり、内部で食事を作り分け合って食べることもできる。袋小路側にはテーブルを広げられるように地面と同じレベルとした。

屋根はところどころ光をいっぱいに通すようにしたことで、一般的な一軒家の北向きキッチンとはまた別の料理空間となる。

D 本棚をつけた居間(1.5期)



ここでは、既存の住宅を減築して新しく住民の場所を計画する。新しく壁と屋根が作られることで、現在ある居間が街に開き、人が訪れるようになる。一人暮らしの高齢者や車を持たず、空いた駐車スペースを持つなど、広い家を一人で持て余す人々が、壁と屋根をつける簡単な操作でこのように新しく場所を提供できるようにしたい。





Y字路と二つの袋小路の分岐点という五差路に面するこの場所には、人々が集まれるような場所を計画する。内部を広く取るために壁はできるだけ外側に配置した。

内部を囲むように一段あげた床があることで、道向きにも内向きにも腰掛けられる家具のように使われる。道に面した大きな壁は、地域の掲示板のような役割を持つかもしれない。

F 坂道にある居間 (1期)



G お風呂のある居間 (1期)



擁壁の上に乗った高台の場所に、共同の浴場を持つ居間を計画する。風呂場と、座敷の床が別々で配置し、その間を通り抜けられるようにする。お風呂は落ち着いた袋小路側の道に向き、座敷は主動線の道に面するようにし、気軽に入って来れるようにする。屋根の下の中屋外空間には洗濯機などを置き、洗濯物も干せるようにする。



参考文献

『時間の中の都市』ケヴィン・リンチ

『都市をたたく』饗庭伸

『時間のなかの建築』モーセン・ムスタファヴィ、デイビット・レザボロー

『時がつくる建築』加藤新一

『未来の住人のために』Y-GSA

あかねちゃん、ゆうきちゃん、グラシアちゃん、樋端くん、わきたくん、川崎くん、上旬さん、同級生のみんな…たくさんの人の支えがあって、最後までやり切ることができました。

ありがとうございました。

Comments from Classmates

講評会の翌日はみきちゃん+喫茶店！というルーティンとても楽しかった。卒制の中で6個くらい？ダイアグラムがあったと思うけど、どれもそれぞれが主役になるくらいのテーマだと思います。図式化が上手で尊敬していました。またおいしくエスキスしましょう！

阿部ほなみ

前期から、自分の住んでいる現状に興味を持っていて、すごく形にしやすい「移り変わり」ということにずっと向き合っていて凄いと思った。最終的な建築の形はもっと考えられると思うけど、ちゃんと自分の興味や疑問を形にできただけですごく実りのある卒業設計になったと思う。吉原賞おめでとう！

永長穂高

みきちゃんが4月からずっと言っていた町のうつりかわりの速度って誰かが考えなくちゃいけないことだと思うんだよね。同時期にエリアごとに建てられてそれが同時に衰退を辿る、そんな実家は誰でも受け入れたくないと思うから！そんな実直なみきちゃんだからこそ今回の提案だと思う。コロナ落ち着いたら伊勢行こうね！笑 がんばろ！

正林泰誠

袋小路一つ一つの入口にコミュニティの所在を明らかにするコモンスペースをつくる提案は、それはそれで良いと思った。ただ、これらは全てこの街の1回目の更新時期に対する提案と言えるのではないかな。これによって袋小路単位の小さなコミュニティを確立した30～40年後の更新では何が必要となり、何が必要となりそうか、その次は…という形で、更新のリズムを維持しながら街が変わっていく様子を、もっと長い時間を追って見せて欲しいと思った。

高橋健

街を実家にしたいという気持ちは、自分のプロジェクトを含めた全部の中で一番共感できるものだなあと考えていました。誰もが思うようなことを、みきちゃんのことばや表現で自分のものにしていっているような感じがして、すごい。住み慣れた街を変えずに変える、私も考えてみたいと思いました。変な時間に電話したり、いつも弱気なわたしを見捨てないでくれてありがとう。ほんとうに心の支えでした！

榊原真歩